

海外の単身高齢者研究レビューについて

畠山明子

海外の単身高齢者研究レビューについて

Reviews on Foreign Studies of Elderly Living Alone

畠山明子

1. 本稿の目的

近年、高齢者のみで構成される夫婦世帯や単身世帯が顕著に増加している⁽¹⁾。単身高齢者⁽²⁾が増加するということは、夫婦であっても一方が死別後単身で暮らす、あるいは、離別や生涯未婚で単身生活を送る高齢者が増加するということである。単身高齢者数の増加にともない、山口ら(2011)は、単身高齢者を孤立させることなく支えていく実践的な方策および研究の課題について考察する必要性を提起している。高齢者のケアを伝統的な直系制家族のもとでの家族扶養に委ねてきた日本社会にとって、三世代家族モデルから核家族モデルへの移行は、高齢者の社会関係に関する分析枠組みの概念化が求められる。そこで、典型的な核家族社会であるイギリスやアメリカの単身高齢者に関する研究成果および課題から、日本的単身高齢社会における課題を明らかにする。

本稿は、単身社会化している欧米の核家族社会における高齢者の社会関係をとくに単身者に限定して研究レビューをおこない、日本社会の単身高齢者の社会関係をめぐる研究課題を取り出すことを目的としている。

2. 単身高齢者の推移

欧米の単身高齢社会について、人口統計学

的な視点から考察をおこなう。

産業化以前は単身高齢者の割合は極めて少なかったが、その割合が増加したのは1950年代以降のことである(Jim, 2003)。さらに、Jim(2003)によると、イギリスでは、1960年代から高齢期の単身者のなかでも、若年者の離婚や生涯未婚者が一般的であることを指摘している。1999年に発表された“Britain Towards 2010: The Changing Business Environment”では、自活できるだけの稼ぎを持って自立生活を送るとくに30代から40代の女性の割合が増加していると報告された。彼女らは、高齢期の単身生活を送る可能性の高い年代層であると考えられる。

一方、アメリカの単身高齢者数の推移を示したものが図1である。これをみると、1960年当時から、女性単身高齢者は男性単身高齢者の半数以上を占めていた。2010年の単身高齢者数は1131万人であり、男性単身高齢者は319万人、女性単身高齢者は812万人である。1960年に実施された国勢調査結果では、配偶者との死別および離別した単身者全体の約60%が高齢者であった。1980年時点では、高齢者の95%が結婚歴を持っているが、離別者は少なかった。つまり、多くは配偶者との死別をきっかけとして単身生活をスタートさせている(Rubinstein, 1985)ことが分かる。また、1940年に親類と一緒に住んでいる高齢未婚者は58%であったが、1970年には29%と半減し

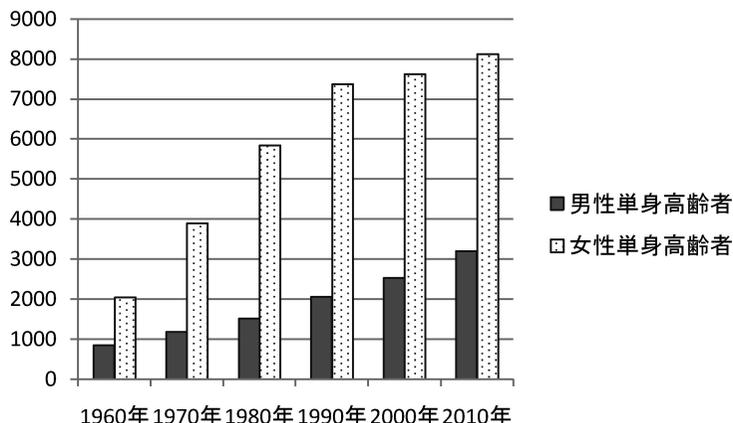


図1 アメリカ単身高齢者数の推移 (単位：千人) 出所：Bureau of the Census (各年次)

(Tissue ら, 1981) 近年も減少し続けている (Dora, 1999) など、生涯未婚の単身高齢者も認められる。

高齢期の単身生活者が多い理由には、可能な限り家族と同居せずに独立して生活することを望んでいること (Fengler ら, 1982b、Rubinstein, 1985) が挙げられる。そのようなライフスタイルは高齢者にとって一般的である (Arling, 1976)。高齢化は、特に夫という配偶者と死別した女性単身高齢者もしくは親族と暮らす女性高齢者の増加によって進展する (Fengler ら, 1982b : 360) といわれる。

3. 単身高齢者研究レビュー

欧米における単身高齢者研究のテーマの推移をみると、社会的孤立の研究からはじまり、社会関係の研究へ発展している。のちに社会関係の研究は、親族や隣人、友人らの第一次集団のサポート役割の解明に向かい、いくつかのサポートネットワークのモデルを提示し、近年にわたってそれらをもちいた実証研究がおこなわれている。

単身高齢者は、1950年代後半の社会的孤立の研究にみられる。高齢期の単身生活における孤立感や孤独感については、Townsend (1957) や Tunstall (1966) をはじめ、数多

くの指摘がある。後に、配偶者がいないこと (Berardo, 1970) や子どもがいないこと (Bachrach, 1980)、不健康、教育レベルの低さとの関連が証明されている (Arens, 1982、Brubaker, 1990)。年齢別に見ると、65歳以上の10%が寂しさを感じ、それは年齢の上昇とともに高まり (Social Exclusion Unit, 2006 : 55)、配偶者を亡くした単身高齢者の場合、後期高齢者よりも前期高齢者に孤立、うつ、倦怠感、不眠傾向があらわれていたとの報告もある (Arseneault, 1986)。しかしながら高齢期の単身生活は、必ずしも孤立や孤独を意味するものではない (Fengler ら, 1982a、Henderson ら, 1986)。孤独に対しよりよく対処でき、健康観が良好であるとする配偶者を亡くした高齢者は、新しい友人をつくるのが容易である (Debor ら, 1983) とされているなど、高齢者は他者と頻繁な接触を保ち、生活上必要なサポートを受けていくことが明らかにされる。

単身高齢者の社会関係研究は、社会的孤立の問題が引き金となり、配偶者や子どもの有無および交流頻度、近隣や友人との関係が明らかにされてきた。ここでは、それら他者との関係別 (子ども、きょうだい、非親族) の特徴と高齢者と他者との相互関係をモデル化した理論について、レビューをおこなう。

(1) 子どもとの関係

家族(子ども)は、単身高齢者のソーシャルネットワークにとって根本的な存在である(Jim, 2003: 152)。このことは、高齢者一般の社会関係と共通した特徴を持っている(Havensら, 2001)。異なる点は、関係性の中心にある配偶者が不在であることだ。配偶者を亡くした高齢者は、子どもや兄弟との関わりが頻繁になる(Lopata, 1979、Matthews, 1991)。Shanas(1973)の調査では、対象者となった約80%の高齢者のもとへ一人ないしそれ以上の子どもがしばしば訪問し、手段的サポートや情緒的サポートを提供していた。サポートの具体的な内容について、Lopata(1973)はシカゴ地方に住む配偶者を亡くした単身高齢者への調査から、息子から金銭的援助を、娘から精神面におけるサポートを受けていたことを明らかにした。Lopata(1973)によると、高齢者の半数以上が上記に示したように支援を受けているという。しかしながら高齢者は子どもに頼るだけではなく、配偶者を亡くした女性単身高齢者の45%は子どもたちに対する母親としての役割を保持していることが重要であるとみなしていた。とくに、母親と娘のつながりは強固なものである(Wenger, 1992)。配偶者を失った女性高齢者のもとを子ども(特に娘)は頻回に訪問することから母親との関係がより緊密なものとなり、情緒的サポートについて最も重要な提供源となる(Lopata, 1979、Anderson, 1984)。配偶者と死別した女性高齢者は、離婚した女性高齢者と比較してより豊かな家族関係があるとも指摘されている。

またこれまでの研究から、階級、健康、宗教、子どもの数、子どもの訪問回数などが生活満足度に影響をもたらすことが明らかにされている。都市規模別にみた単身高齢者の生活満足度を測定した調査では、配偶者と死別した地方に住む単身高齢者や都市において配偶者と死別ののち子どもと住んでいる単身高

齢者より、都市居住者に低い生活満足度があった(Fenglerら, 1982a)。Rice(1989)によると、女性高齢者の配偶関係別にみた生活満足度およびソーシャルサポートの関連において生活満足度を高めていたのは、「訪問者の数」と「未婚者であること」で、子どもがいない場合の生活満足度は低かった。調査対象者のうち、未婚者の約90%は専門的な教育を受け、教師やソーシャルワーカーなどの仕事に就いており、配偶者と死別した約47%は事務職員や工場労働者であった。このことから、専門的な教育を受け、高度な技術を要する職業に就いていることが高い生活満足度につながることを示唆された。

(2) きょうだいとの関係

重要な二つのサポート源(配偶者、子ども)を持たない単身高齢者(とくに未婚者)は、親戚(きょうだい、おいやめいなど)をサポート源として構築することになる(Goldbergら, 1986、Brubaker, 1990)。子どものいない高齢者、配偶者を亡くした単身高齢者および未婚者にとって、きょうだいは主要なソーシャルサポート源となる(Shanas, 1973、Anderson, 1984、Wilsonら, 1994など)。とくに、重要な関係は姉妹間関係である(Anderson, 1984)。姉妹関係は、付き合いの親密さ、サポート、重要な立場について高い割合を示す一方で、わずかの羨望や憤りを持つことで関係を維持している(Brubaker, 1990)。

(3) 非親族との関係

単身高齢者は、家族と同居する高齢者と比較して、交友関係が豊かで社会参加に熱心である(Wisterら, 1990など)。62歳以上の夫のいない女性を対象にした調査では、過去3年間に失った友人の数より新しく築いた友人の数の方が多かった(Adams, 1987)。女性単身高齢者は、男性単身高齢者よりも友人関

係（とくに同性の友人関係）を形成し、保持する技術について、優位性が認められている（Jim, 2003: 179）。離婚した女性高齢者は、友人関係のつながりが強い（Goldbergら, 1986: 110）。さらに、結婚未経験者の多くには親友がおり、若い時から培ってきた単身生活のノウハウを駆使し、高齢期においても高い自立心を持っている（Rubinstein, 1987）という。

（４）社会的支援のモデル

以上の（１）（２）および（３）では、単身高齢者と他者との間で取り交わされるソーシャルサポートを取り上げた。さらに、それらのソーシャルサポートを介して編成される高齢者と他者とのネットワークを整理したモデルが以下の「課題特定モデル」および「階層的補完モデル」である。

Litwakら（1969）は、親族は長期的な関与を必要とする課題、隣人は日常的な対面接触を必要とする課題、友人は選択性の高さを要する課題に対して有効であるなど、それぞれの特質に適合した役割を果たすことを明らかにし、後にCantor（1979）は「課題特定モデル」と名付けた。これに対し、10項目にわたる想定された状況について、子ども・子ども以外の親族・友人・隣人・公式組織のうち、誰を援助源として選択するかをたずね、大半の項目において、一番目に親族（子ども）が選択されていること、そして、子どもとの関係が疎遠であったり、子どもが遠隔地に居住している場合には、それ以外の親族・友人・隣人・公式組織が選択される割合が高くなった。このことから、高齢者と援助源の関係の序列を重視する「階層的補完モデル」が導き出された。なお、その後、Wengerら（1990）は、より具体的に高齢者のサポートにかかわる階層性を以下のようにあらわしている。最初に登場するのは配偶者である。配偶者とは手段的サポート、情緒的サポートのいずれも

提供でき、受け取りあう相互のやりとりが可能である。次いで、娘や息子（子ども）である。子どもたちからは手段的サポートも情緒的サポートも期待できる。一方きょうだいは、基本的な情緒的サポートとして親密な関わりを持ち、手段的サポートについては緊急時に限って提供できる。それに続く友人は情緒的につながり、近隣住民は基本的な手段的サポートと緊急時のサポートをおこなう。最後に孫、おひやめい、いところは以上のサポートを受けることができない場合に登場する。

また、Wenger（1989）は親族との近接性、家族、友人および近隣関係の大きさ、そして、高齢者と家族、友人、近隣と地域集団間の介入の程度を考慮して、高齢者の社会関係を五つに分類した。

限定的な家族依存型（Local family dependent）

このネットワークは小さくまとまり、かつ密集する。緊密な家族関係と数人の友人と近隣住民からなる。多くは、子どもやきょうだいと同居もしくは近居し、たいていは娘を頼る。家族が提供するサポートは多岐にわたることになる。地域社会との関わりは極めて少ない。この形に該当する高齢者のネットワークは限定的で、他的高齢者より不健康になりやすい。

統合型（Local integrated）

この形は、家族、友人および近隣住民と近い関係を持っている。多くの友人は近隣に住んでいる。ネットワークは長期間居住することによって築かれ、過去や最近になって、教会やボランティア組織などの地域集団で活動していることで構築される関係も含まれる。

独立型（Local self-contained）

手を伸ばせばすぐ届く関係であり、しばしば接触する少なくとも一人の親戚を持つこと、もしくは、きょうだい、おひやめいが近くにいることがこれに相当する。通常は子どもがいないタイプである。ネットワークは他の形

より小さくなりやすい。

幅広いコミュニティ中心型 (Wider community focused)

遠距離にある親戚 (とくに子ども)、友人、何人かの近隣住民とのより活発した関係である。近しい親戚がいない場合に当てはまる。地域やボランティア組織も含まれ、ネットワークは大きくなる。

私的型 (Private restricted)

既婚率は高いが、配偶者がいないなど近い親戚がいない。近隣住民との関係は最低限で、わずかな友人と近隣住民を持つのみである。

いずれのモデルも、高齢者のネットワークは親族や近隣中心であり、その関係性は少数選択的であることを指摘している⁽³⁾。

(5) 論点と残されている課題

「高齢者は孤立する」ことがかつて通説とされてきた。産業化にともなう親族関係の衰退は、退職や身体的な衰えにより社会関係を喪失しがちな高齢者に社会的孤立をもたらすと考えられたのである (Townsend, 1957など)。しかし、1950年代には、この通説は神話にすぎないことが明らかとなった (Tunstall, 1966など)。その後、研究者の関心は産業社会においても親族関係が存続している理由の解明に向けられた。

単身高齢者と他者との関係について簡単に整理すると、まず、子どもを基本とした関係が形成され、さらに、きょうだいが登場する点が大きな特徴である。親族は、身体的な介護などの負担をとまなうサポートだけでなく、情緒的な安定を与えるサポートも提供している。また、非親族である近隣住民や友人とは、手段的サポートについては限定的であるが、問題解決志向をもたず、ともに余暇を過ごしたり、何気ない会話を楽しむような相互作用について、積極的な関係性がみられる。

高齢者のサポートネットワークについて課

題特定モデルと階層的補完モデルをレビューしたが、厳密には、課題特定モデルは課題遂行の有効性を示すモデルであり、階層的補完モデルは高齢者の援助源に関する選好を示すモデルである。したがって、どちらも実際に行われたサポートを説明するモデルではない。高齢期は、数々の役割喪失と身体的能力の衰退によって特徴づけられるライフステージにある。そこで、職業からの引退、配偶者との死別など高齢期に特有の役割移行のプロセスとインフォーマルサポートの変化を追跡し、サポートの実際を明らかにしていく必要がある。

また、友人や近隣住民が提供しているサポートの内容については多くの研究で一致をみている。階層的補完モデルによると、子どもの利用可能性が低いサポートにおいては、友人や隣人を援助源として選択することから、非親族における親族が果たす役割の機能的補完性が問題となる。

4. 日本の単身高齢者にかかわる研究課題

研究レビューの結果から、わが国の単身高齢者にかかわる研究課題は以下の二点になる。

第一に、子ども以外の親族に対するサポート担い手としての期待である。高齢者の社会関係に関する研究は、子どもとの関係を基本として進められてきた。このことは日本でも同様である。特に海外では、高齢者と孫、高齢者ときょうだい関係を取り上げた研究が多くみられた。親族および非親族のサポートの階層性を説明した Cantor (1979) の階層的補完モデルや Wenger (1990) らの研究にも見られるように、諸外国では配偶者や子供に代わる孫やきょうだいのサポートが前提とされている。一方日本では、高齢者と孫やきょうだいとの関係を捉えた研究は極めて少ない。近年、孫世代は、祖父母との間に親密な関係

を持ち、自らを主たる介護者を支える補助介護者とみなして家族介護と社会的介護を併用しようとする意識を持っていることから、高齢者介護の重要な担い手として期待できる（藤若ら, 2010）ことが指摘された。また、高齢者のきょうだい関係の課題について直井（2010）は、近年の未婚率の上昇や子供との同居率の減少にともなう高齢者のきょうだい関係の重要性から、相互の介護関係にも転化する可能性を示唆している。日本の単身高齢者にとっても、孫やきょうだいは支援提供者となりうる可能性を持っているであろう。

第二に、家族形態の変容にともなう社会関係構築プロセスの解明である。近年のイギリスでは、85歳以上の女性の20%は子どもがない（Population Trends, 2000 : 31）との指摘もあり、このことはこれから少子化と生涯未婚者が増加する日本における子どもが担うケアの問題と関連する。先行研究において、病气や介護を要する場合に別居子が選択されることが多い（須田, 1986 : 石田, 2000 など）ことが指摘されている。要介護者の高齢化は介護に関わる子供の高齢化をもともなうため、他の介護資源として子ども以外の親族や近隣住民、友人のかかわりがどこまで代替機能を担うことになるのかが問われる。単身高齢者がいかなる他者を求め、関係を構築していくのかという命題を解明するには、これまであまりおこなわれてこなかった縦断的研究によって、小家族化のなかでの単身高齢者の社会関係の消滅と継続および再生のメカニズムを明らかにする必要がある。

注

(1) 図2に見るように、近年の高齢者世帯の類型は、三世代世帯が減少し、高齢者のみで形成される世帯が急増している。現在は夫婦のみ世帯数が単独世帯数を上回っているが、2020年には単独世帯数が夫婦のみ世帯数よりも増加するという（2008年3月推計 国立社

会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」より）。

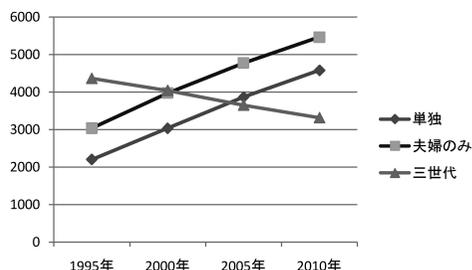


図2 近年の高齢者世帯類型の推移

(単位: 千人) 出所: 国勢調査結果 (各年次)

- (2) 本稿において「単身高齢者」とは、配偶者と死別・離別している、あるいは、未婚のために単身で生活をしている高齢者をいう。
- (3) 単身高齢者と高齢者一般の社会関係に関してその違いを明らかにするならば、表1のように整理することができる。サポートをおこなう他者がいる場合は○、いない場合は×を記し、その特徴を記述した。

高齢者が配偶者との死別、離別あるいは未婚のため単身である場合、配偶者は存在しないため、配偶者がサポートをおこなうことはできない。親族（子ども・きょうだい）は、単身高齢者・高齢者一般ともに関係の親密さ・サポート内容に深化が見られる。とくに、単身高齢者の場合はその関係性がより強まる。なお、孫については、単身高齢者の欄には△を記している。高齢者の約4%が孫と暮らしている（Simmonsら, 2003）といわれているが、高齢者と孫の関係性には以下のような研究がある。父方の祖母と母方の祖父のもとを少なくとも年に三回以上訪問する孫は、彼らの祖父母を全く訪れない孫よりも親密な関係性を形成していた（Matthewsら, 1985）。とくに、母方の祖母との関係がもっとも親密である（Hodgson, 1992）。18歳以上の孫の大多数は、祖父母に親近感を感じ、月に何度か電話か手紙で連絡を取り合っている（Hodgson, 1995）。近年では、高齢者と孫は、携帯電話やEメールによって交流を維持させている（Solizら, 2006）という。さらに、自分たちの祖父母を助ける責任も感じていた（Robertson, 1976）。単身高齢者についても高齢者一般と共通する

特徴を持っていると考えられるが研究数が乏しいため、単身高齢者と孫の関係は今後の研究課題の一つとなるであろう。近隣住民や友人は、単身高齢者の場合は一層その役割の重要性が明らかにされている。

引用文献

- Adams, Rebecca G (1987) "Patterns of network change: A longitudinal study of friendships of elderly women" *The Gerontologist*, 27 (2), 222-227.
- Anderson, Trudy B. (1984) "Widowhood as a Life Transition: Its Impact on Kinship Ties" *Journal of Marriage and the Family*, 46 (1), 105-114.
- Anne Gray (2008) "The social capital of older people" *Ageing and Society*, 29, 5-31.
- Arling Greg (1976) "The Elderly Widow and Her Family, Neighbors and Friends" *Journal of Marriage and the Family*, 38 (4), 757-768.
- Arens, D. A. (1982) "Widowhood and well being: An examination of sex differences within a casual model" *International Journal of Aging and Human Development*, 15, 27-40.
- Arsenault A. M. (1986) "Sources of support of elderly Acadian widows" *Health Care of Women International*, 7, 203-219.
- A. S. Henderson, Ruth Scott, D. W. K. Kay (1986) "The Elderly Who Live Alone: Their Mental Health and Social Relationships" *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, 20, 202-209.
- Bachrach Christine A. (1980) "Childlessness and Social Isolation Among the Elderly" *Journal of Marriage and the Family*, 42(3), 627-637.
- Bedford, Victoria H (1996) *Aging and the Family: Theory and Research*.
- Berardo F. M. (1970) "Survivorship and social isolation: The case of the aged widower" *The Family Coordinator*, 1, 11-25.
- Britain Towards 2010: The Changing Business Environment.
- Brubaker Timothy H. (1990) *Family Relationships in Later Life*, Sage Publications, Inc.
- Cantor MH (1979) "Neighbors and friends: An overlooked resource in the informal support systems" *Research on Aging*, 1, 434-463.
- Chappell, Neena L. (1992) *Social support and aging*, Toronto: Butterworths.
- Debor, L., Gallagher, D., Leshner, E. (1983) "Group Counseling with the bereaving elderly" *Clinical Gerontologist*, 1, 81-90.
- Dewit, David J., Andrew V. Wister, & Thomas K. Burch (1988) "Physical distance and social contact between elders and their adult children" *Research on aging*, 10 (1), 56-80.
- Dora L. Costa (1999) "A house of her own: Old age assistance and the living arrangements of older nonmarried women" *Journal of Public Economics*, 72, 39-59.
- Fengler Alfred P., Nicholas Danigelis (1982a) "Residence, the Elderly Widow, and Life Satisfaction" *Research on Aging*, 4(1), 113-135.
- Fengler Alfred P., Nicholas Danigelis, Virginia C. Little (1982b) "Later Life Satisfaction and Household Structure Living with Others and Living Alone" *Ageing and Society*, 3 (3), 357-377.
- 藤若恵美・進藤貴子・永田博 (2010) 「孫世代の高齢者介護観と介助に対する自信—祖父母との親密性と介護経験との関連—」『川崎医療福祉学会誌』19 (2), 351-357. 川崎医療福祉大学.
- Goldberg Gertrude S., Ruth Kantrow, Eleanor Kremen, Leah Lauter (1986) "Spouseless, Childless Elderly Women and Their Social Supports"
- Gibson, Diane, Stephen Mugford (1986) Expensive relations and social support, in Hal L. Kendig (Ed.), *Aging and families: A social networks perspective*, 63-84, Boston: Allen & Unwin.
- Havens, B., Donovan and M. Hollander (2001) *Policies That Have Positive or Negative Impacts Informal Care in Canada*, Paper presented at the Congress of the International Association on Gerontology, Vancouver, British Columbia.
- Hodgson, Lynne Gershenson (1992) "Adult grandchildren and their grandparents: An enduring bond" *International Journal of Aging and Human Development*, 34 (3), 209-225.
- Hodgson, Lynne Geeshenson (1995) *Adult*

- grandchildren and their grandparents: The enduring bond*, 155-170, in Jon Hendricks (Ed.), *The ties of later life*. Amityville, NY: Baywood.
- Ingrid Arnet Connidis (2010) *Family Ties and Aging Second Edition*.
- 石田路子 (2000) 「単身高齢者の生活支援と親族ネットワーク—漁村における親族ネットワーク機能の変化から」『日本の地域福祉』(14), 58-70, 日本地域福祉学会.
- Jim Ogg (2003) *Living Alone in Later Life*, London: Institute of Community Studies.
- Keith, Pat M., Kathleen Hill, Willis J. Goudy, and Edward A. Powers (1984) "Confidant and well-being: A note on male friendship in old age" *The Gerontologist*, 24, 318-320.
- Litwak E., Szelenyi I. (1969) "Primary group structures and their functions; Kin neighbors and friends" *American Sociological Reviews*, 34 (4), 465-481.
- Lopata, H. Z. (1973) *Widowhood in an American City*, Cambridge: Sheckman Publishing Company.
- Lopata, H. Z. (1979) *Women as Widows: Support systems*, New York: Elsevier.
- Matthews A.M. (1991) *Widowhood in later life*, Toronto: Butterworth.
- Matthews, S., Sprey, J. (1985) "Adolescents' relationships with grandparents: An empirical contribution to conceptual clarification" *Journal of Gerontology*, 40, 621-626.
- Murphy, Mike (2004) "Models of kinship from the developed world" in Sarah Harper (Ed.), *Families in ageing societies: A multidisciplinary approach*, 31-52, New York: Oxford University Press.
- 直井道子 (2010) 「2章4.1 社会関係」大内尉義・秋山弘子編『新老年学 第3版』東京大学出版会.
- Population Trends (2000)
- Rice Susan (1989) "Single, Older Childless Women: Differences Between Never-Married and Widowed Women in Life Satisfaction and Social Support" *Journal of Gerontological Social Work*, 13 (3/4), 35-48.
- Robertson, J. F. (1976) "Significance of grandparents: Perception of young adults grandchildren" *The Gerontologist*, 16, 137-140.
- Rubinstein Robert L (1985) "The elderly who live alone and their social supports" *Annual review of gerontology and geriatrics*, (29), 165-193.
- Rubinstein, Robert L (1987) "Never married elderly as a social type: Re-evaluating some images" *The Gerontologist*, 27 (1), 108-113.
- Shanas E. (1973) "Family-kin networks and aging in cross-cultural perspective" *Journal of Marriage and the Family*, 35, 505-511.
- Simmons, Tavia, & Jane Lawler Dye (2003) *Grandparents living with grandchildren*, U.S. Census Bureau, Census 2000 Special Reports, C2KBR-31. Washington, DC: U.S. Government Printing Office.
- Social Exclusion Unit (2006) *A sure Start in Later Life*, Her Majesty's Stationery Office, London.
- Soliz, Jordan Eli, Mei-Chen Lin, Karen Anderson & Jake Harwood (2006) "Friends and allies: Communication in grandparent-grandchild relationships" 65-79, in Kory Floyd & Mark T. Morman (Eds.), *The family circle: New research in family communication*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- 須田木綿子 (1986) 「大都市地域における男子ひとりぐらし老人の Social Network に関する研究」『社会老年学』(24), 36-51, 東京都老人総合研究所.
- Tissue, T., Miccoy, J.L. (1981) "Income and living arrangements among poor aged singles" *Social Security Bulletin*, 44, 3-13.
- Townsend, P (1957) *The Family Life of Old People*, Routledge & Kegan Paul.
- Tunstall J. (1966) *Old and alone: A sociological study of old people*, Routledge and Kegan Paul.
- Warren, D.I. (1981) *Helping Networks: how people cope with problems in the urban community*, Indiana, University of Notre Dame.
- Wenger, G Clare. (1989) "Support networks in old age—constructing a typology" in Margot Jefferys (Ed.) *Ageing in the 20th Century*, London, Routledge.
- Wenger, G Clare. (1992) "Help in Old Age-Fac-

- ing up to Change : Alongitudinal Network Study” Liverpool University Press. in John Moge (Ed.) *Aiding and Ageing : the coming crisis in support for the elderly by kin and state*, Westport CT, Greenwood Press.
- Wenger, G Clare, Shahtahmasebi, S. (1990) *Variations in support networks : some social policy implications*.
- Wister A (1990) “Living arrangements and informal social support among elderly” *Journal of Housing for Elderly*, 6 (1-2), 33-43.
- Wilson Jane G., Robert J, Calsyn, Jacob L, Orlofsky (1994) “Impact of Sibling Relationships on Social Support and Morale in the Elderly” *Journal of Gerontological Social Work*, 22 (3/4), 157-170.
- 山口麻衣・冷水豊・斉藤正茂・ほか (2011) 「大都市独居高齢者の近隣住民・知人による声かけ・安否確認に対する選好」『日本の地域福祉』24, 21-32, 日本地域福祉学会.

表1 単身高齢者と高齢者一般の社会関係の違い

	単身高齢者	高齢者一般
配偶者	×	○ ・配偶者はネットワークの中心 (Warren, 1981)。 ・多くの高齢男性にとって、唯一の信頼できる友達は妻である (Keith, 1984)。
子ども	○ ・配偶者を失った単身高齢者と子どもの関係はより緊密なものとなる (Lopata, 1979 : Matthews, 1991)。	○ ・高齢期にある親の80%は、彼らの子どもの少なくとも一人と週に一度は関わりを持っていた (Chappell, 1992)。 ・子どもが遠距離に住んでいる場合、両親のもとを時々泊まりがけで訪問、電話や手紙によって交流している (Dewitら, 1988)。
きょうだい	○ ・手段的サポートと情緒的サポートの提供者となり、とくに情緒的サポートについては顕著 (Lopata, 1979 : Matthews, 1991)。	○ ・きょうだいとの関係が悪いと回答するのは高齢者の5%、ほとんどの関係は良好で頻繁に連絡を取り合い、精神的なつながりを感じている (Bedford, 1996など)。 ・とくに、同性のきょうだいに親近感を覚える傾向にあり (Gibsonら, 1986)、女性高齢者は、男性高齢者に比較して相手が男兄弟・女姉妹に関わりなく関係を保持する (Murphy, 2004 : Ingrid, 2010)。
孫	△	○
隣人・友人	○ ・情緒的サポートの提供者 (Wenger, 1992)。 ・友人や近隣住民は、寂しさを感じたときの話し相手、簡易な物品の貸し借り時に重要な人々である (Gray, 2008 : 10)。	